

中山間地域活性化に向けた服飾デザインとアートマネジメント －「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクトを事例として－

Clothing Design and Arts Management for the Activation of Intermediate and Mountainous Area - the Case Study of the Project 'Aurinko Tokuji Talo'

研究代表 水谷由美子*

共同研究者 松永美代子・木村和枝** 浅田陽子・松原直子・武永佳奈・藤田幸司***

Chief Researcher : Yumiko Mizutani*

Collaborative researcher : Miyoko Matsunaga/Kazue Kimura** Yoko Asada/Naoko Matsubara/
Yoshina Takenaga/Koji Fujita***

キーワード：中山間地域活性化 服飾デザイン アートマネジメント 山口市徳地 アウリンコ徳地タロ
手工芸 ヒンメリ 空間デザイン 手漉き和紙 地域資源

Keywords : Activation of Intermediate and Mountainous Areas, Clothing Design, Arts Management, Tokuji Yamaguchi City, Aurinko Tokuji Talo, Hand-crafts, Himmeli, Space Design, Handmade Japanese Paper, Local resources

This thesis is focused on the first year activities of 'Aurinko Tokuji Talo' project for the Activation of Intermediate and Mountainous Areas, Tokuji in Yamaguchi-city. This project was realized by the 'Hori Yonku Machizukuri no Kai', sponsored by Yamaguchi Prefecture and Yamaguchi City in 2011. Our creative field was extended from clothing and accessories design to arts managements for town planning.

Here we describe about the activities of the creation with local resources, mainly Japanese traditional paper in Tokuji and used Kimono materials. For example, LED Lamps, Space design, Hakama Pants, Life goods and ornaments were made in various workshops. About the renovation of the space, called 'Aurinko Tokuji Talo' to create, exhibit and communicate, we developed the functions of discovery, creativity, tradition and originating of culture and arts in Tokuji. We discuss here about the achievements and the difficulties.

はじめに

筆者の企画デザイン研究室が「中山間地域活性化に向けた服飾デザインとアートマネジメント」をテーマに、山口市徳地をフィールドとして研究をすることになった経緯について、まず述べておきたい。

山口県佐波郡徳地町は2010年10月1日に全国で政策的に行われた平成の大合併の一環で、山口市に合併された。それ故に、現在は山口市の中山間地域に位置し

た1地域として徳地の地名がある。徳地は豊かな森林に囲まれ、重源上人とともにある長い歴史や生活文化が育まれてきた。

今回は旧徳地町の7つの行政区の一つであった堀において、まちづくりに興味がある人々によって、地域文化や産業支援に関する発信拠点を作りたいという申し出があり、地域との共同の研究創作活動がはじまった。1章では「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェク

* 山口県立大学大学院国際文化学研究科教授

* Professor of the Intercultural Studies of Graduate Schools in Yamaguchi Prefectural University

** 山口県立大学大学院国際文化学研究科2年

** Second Grade for of the Intercultural Studies of Graduate Schools in Yamaguchi Prefectural University

*** 山口県立大学大学院国際文化学研究科1年

*** First Grade of the Intercultural Studies of Graduate Schools in Yamaguchi Prefectural University

トについて具体的に概要を述べる。

その前に、筆者が服飾デザインを主なメディアとして、アートマネジメント領域への広がりの中で、まちづくりの活動も視野に入れた研究創作をするようになった経緯についてまず述べたい。なぜなら、服飾デザインというメディアが、流行を作るためだけのメディアではないということ、また地域に根差した生活文化を牽引することが可能なメディアであるという立脚点を明らかにしたと考えるからである。

筆者は研究室の学生とともに長年、地域資源を生かした服飾デザインの表現活動を継続してきた。地域資源を生かすということは、地域文化芸術や産業界の担い手との共同作業が伴う。そこで、地域の商店街や商工会議所、デザインに関する協会やファッションビジネスの企業、行政や美術館などの文化施設さらに聖堂、寺院、鉄道などの関係者と連携して、ファッションショーの運営を行うことで、地域でのネットワークが形成されてきた。このネットワークが新しいプロジェクトのきっかけや機動力を生み出す役割もしてきた。

服飾デザインはファッションとして世界のトレンドとの関わりが強く、都市的でグローバルな要素をもっている。それ故に、ファッション帝国とも言われる中心と周縁としてのローカルなファッションが存在している。こうした中で、中心的な存在であるパリのオート・クチュールやプレタ・ポルテのデザイナーたちでさえも、半年に一度のコレクションを発表し続けながらも、長く着続けられる服つまりスタイルを創造したいと考えてもいるのだ。

ガブリエル・シャネルが晩年に考案したシャネル・スーツはそのような考え方を背景としている。また、三宅一生はファッションデザイナーと自ら言うのをいやがり、服飾デザイナーを好んで使っている。現在の衣服文化は流行という時には暴力的とも言える力で、変化を余儀なくされる側面をもっているが、サステイナブルな生活文化が追及されている今だからこそ、長く着続けられるような定番の服のデザインも求められている。

筆者は山口で1994年から大内文化とサビエルをテーマにしたファッションショーを実施し、地域文化を見つめてきた。歴史から現代に目をやると、山口は非常

に自然に恵まれ、都市の中に自然が融合されている点に特徴がある都市だと言える。山口市には平成の大合併で、海から田園そして中山間の巨大な空間が包摂されるようになった。山口市の魅力は、以上のように都市と田園そして海が非常に近いことだけでなく、市街地に緑豊かな公園が占める割合が大きく蜚が見られる川も流れている。

そこで、2007年から田園をテーマに、そこから日常的な服飾デザインを発想するルール・ファッションに着手した。具体的には、地域の農業関係者と連携して農作業着に着想を得た服飾デザインを発表してきた。なぜなら、地域には地域でしかできない方法や素材があるはずである。そして地域では分野を超えた連携がもたれやすく、その連携を生かした創作の基盤がしやすい利点がある。こうした利点を生かして、山口らしいライフスタイルを創造することを目指す手法の一つとして、地域資源を用いた表現によって、服飾の流行ではなく山口のライフスタイルを作る創作研究をすることに興味をもったのである。

上述したように2007年にまず農作業着から着想を得た服飾デザインをするために、仁保の農業者の協力を得て情報収集を行い、その結果を仁保の道の駅で催した展覧会で作品を発表した。メディアで広く地域で認知されたことが契機となり、山口県立美術館が主体で立ち上げられたHEART2007のプロジェクトに参加することになった。筆者は「アグリ・アート・ツーリズム」^(註1)の部門の総合ディレクターを担当した。

農業に関わるアートをまちに設置し、一般の人々に巡って歩いて楽しんでもらおうという趣旨で行われたものだ。農作業着から着想された服飾デザインの作品、ワークショップで子供たちが作成した布の造形による野菜、そして仁保の朝採り野菜や全農連がアレンジした山口県各地の野菜などが、山口市中心商店街に設置されたブースで展示された。さらに、ブースの壁には山口県美展で優秀賞を受賞した作品の拡大コピーも飾られ、商店街は不思議な美術館として浮上した。

都市的空間を野菜やアグリ・ファッションで埋め尽くすことで、都市と自然の二項対立ではなく、それらが融合した世界が出現され、地域の人々に改めて山口の都市性を再認識させる機会となったに違いない。

以上は都市の中での服飾造形からアートへと広がり

を見せた、1種のアートマネジメントの実践である。その後、この活動は同じ方法では継続して行われることはなかったが、当研究室ではルーラル・ファッションショーを山口県立美術館で実施し、有限会社ナルナセバとの共同プロジェクトで、モンペ・ヌーヴォーを商品化して発表した。

従来は地域の歴史や文化を典型的に表わす場所をステージに選び、地域の協力を得て、ファッションショーを実施する形式をとっていた。しかしながら、今回のプロジェクトは表現活動を地域との共同企画・運営で行うことが大きく異なっている。活動のモチベーションの主体は我々ではなく地域にあることが重要な確認事項である。

なぜならこのプロジェクトは山口県中山間地域元気若者活動支援事業と山口市中山間地域資源付加価値創造支援事業の助成によって実施されたもので、特に助成金の性質は若者が中山間活性化のために、地域に出かけていき、地域にある課題を解決するために、参加していくことが期待されるものであったからである。

今回、共同することになったのは「堀四区まちづくりの会」である。堀はかつて徳地町役場があり、私鉄の防石鉄道の終着駅があった。林業や農業が栄えていた時代には、堀の商店街には大いなる賑わいがあったのだ。防石鉄道の廃止や車社会の到来、林業や農業の後継者問題による過疎化などが続き、商店街は賑わいを失っていった。

山口市に合併されたために、旧徳地町で独自に継承されてきた文化や歴史に焦点を当て、保存とともに新しい文化創造への欲求が地域住民によって生まれてきたことは自然なことだ。堀四区まちづくりの会は、自治会長が短期間に代わるために、1つの事業の継続性が保てないことを理由に、地域の人々の自発的な考えから生まれたのだ。

研究室の役割は、地域の要望を叶えるために援助することと同時に、研究室の考えを提案し一緒に行動するように働きかけることである。まずは、地域の文化創造活動をするための地馴らしとして、研究室が考えることを実施するのではなく、まずは地域にある文化芸術の担い手や場所などをリストアップし、地域外よりはむしろ地域内の人に紹介して、地域の創造的環境を地域と大学の双方が認識することが重視された。

地域におけるアートマネジメントを実行するには、

活動拠点が必要である。この拠点がアウリンコ・徳地・タロと命名された空間である。以下では、まず上述のテーマを達成するためにこのプロジェクトがどのように立ち上がり、活動が実施されたかについてその概要を述べる。(文責：水谷)

1. 「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクトの概要

2010年2月末頃に徳地地域において文化芸術さらに観光の視点から活性化の活動をしている徳地観光協会会長の前田繁志と古民家再生事業に取り組んでいる松田龍二から研究室に共同研究の申し出があった。内容は武永佳奈が取り組んできた徳地の古民家再生事業によって放出された着物地で作る「袴パンツプロジェクト」を出発点にすることと、元呉服屋「まるしょう」を借りて今後の徳地の文化芸術の発信拠点を作るということであった。(写真1)

武永はすでに大学院進学が決まっており、筆者はこの申し出と活動内容に賛同した。実行には予算が必要であるため、第1回目の話し合いはまず予算獲得の調査・検討をすることで終わった。

筆者は4月の所属大学の入学式で知事の挨拶(代理として岡田実副知事が挨拶)があり、そこで山口県が本学の付属地域共生センターに依頼して、中山間地域の活性化に向けたプロジェクトを実施する旨の話を偶然に聞いた。調べるとそれは山口県中山間地域元気若者活動支援事業のことであった。学生とともに書類を取り寄せ企画書を作成し応募に向けて準備に入った。

これは地域とともに実施するものであり、申請書作成の途上で、受け入れ先の堀四区まちづくりの会のメンバーと4月にミーティングを持った。2011年度の当研究室に所属する大学院ゼミ生6名と学部生2名を伴って会議に参加した。ここで大学院生はそれぞれの研究創作と絡めつつ、全員が徳地の活性化に向けたプロジェクトに関わる意思をもった。

それゆえに、筆者は研究創作におけるゼミ生個々の得意分野におけるデザイン力と技術力を総動員して、徳地の活性化に向けたプロジェクトを計画することにした。

まずはこれらの6名のゼミ生の紹介をしておきたい。すでに徳地地域の人々と袴パンツプロジェクトを開始する素地を作っていた武永佳奈、ファッション理論を目指しながらもファッションと空間デザインの関

係に興味を持っている藤田幸司、ニットアート作家としてプロ活動をしていて社会人学生として入学してきた浅田陽子、英語の通訳業をしていてアートマネジメントの研究を始めたばかりの松原直子、パッチワーク指導をしていてフィンランド国立ラップランド大学での共同研究への参加でサーミ文化に触発された松永美代子、そして徳地在住で美祢の地域資源である大理石と徳地和紙を組み合わせた作品を制作しはじめた木村和枝である。

筆者はこれらの共同研究者の活動を統括し、地域の人々との総合的な調整をして、活性化に向けた活動を実施してきた。

徳地は山口県の中央部の中山間地帯に位置し、はじめに述べたように2010年から山口市に合併された町で、豊かな森林資源に恵まれている。歴史的には平安末期から鎌倉時代初期に、東大寺大仏殿の再建のための材木を求めて、重源上人が徳地入りし、その結果、豊かな生活文化がもたらされた。後に触れる石風呂(いしぶろ)もその一つである。

今回の地域活性化において、徳地の人々の基本コンセプトはまずは地域資源として伝統的な徳地手漉き和紙をテーマにすることであった。山口市指定・登録文化財^(註2)によると徳地手漉き和紙は享禄5年(1532)・永禄7年(1564)の『伊勢両大神宮中国九州御祓賦帳』に「小古祖紙屋孫衛門尉」と見られ、徳地小古祖に紙屋があり「得地紙」が生産販売されていた。江戸時代には、防長四白(米・塩・蠟・紙)の生産が奨励されていたため、徳地では藩の保護のもとに藩専用の紙を生産していた。しかし、明治6年(1673)に請紙制度が廃止され、さらに量産を目的とする機械抄紙法が西洋から導入され和紙の需要は激減し、長い歴史をもつ伝統技術は消滅の危機にさらされていると認識されている。

現状を地域の人々に聞き取ったところ、旧徳地町の島地村では紙漉きが衰退したとはいえ、戦後しばらくは、ほとんどの農家が農閑期に家で紙を漉いていた。その後、子孫の農業離れや和紙の需要が激減し、紙漉きをする家が減り、現在では千々松哲也の千々松製紙所と主に原料を扱っている山内幸夫の2軒となっている。

それゆえに、後継者問題が大きな課題となってい

る。山口市との第三セクターで設立された重源の郷に設置された紙漉き工房「白波」では、一般の人々が紙漉き体験ができるようになっており、広報にも力が入れられているが、独立して紙漉き業を担おうとする人は現れていない。

研究室としては、堀四区まちづくりの会の人々の希望を考え、メンバーそれぞれの創作分野で、徳地手漉き和紙を用いたワークショップを重源の郷で実施しようと計画を立てることにした。

徳地地域の活性化をするにあたり、多様なアプローチをしながら、地域内外の幅広い人々にまずは徳地和紙を知り、興味をもってもらうことが大切と考える。全国に中山間地域で同じような活性化に取り組む例はある。そこで徳地に特徴を出す一つの方法として、筆者は地域の活性化に、フィンランドとの国際文化交流も一つの柱にしたらどうかという提案をした。山口市に合併された徳地は、市内でも中山間に位置し、自然が豊かで森と湖(人口湖)があり、フィンランドとの共通点も多い。

たとえば、徳地には重源上人の政策によって生まれた日本でも有数の石風呂がいくつも遺されており、かつては50~60か所もあったことが知られている。この石風呂はフィンランドのサウナのように蒸し風呂なのだ。

山口県立大学とフィンランドのラップランド大学の間で国際共同研究が2009年から実施され、2010年からは学术交流提携が結ばれた。筆者はこの国際共同研究の統括者で、2009年から毎年、ラップランド大学に行きワークショップを実施している。これをきっかけにフィンランドとの交流が非常に活発となり、交流の素地として重要な信頼できる人脈も形成された。

それゆえに、徳地の文化芸術の活性化に国際文化交流を組み入れ、新しい特色にすることを提案したのだ。当初のミーティングでもこの提案が受け入れられた。石風呂とサウナに関するプロジェクトはまだ実現されていないが、以下で紹介されるワークショップの一つにフィンランドの装飾であるヒンメリのプロジェクトが実現された。山口県立大学大学院にラップランド大学から交換留学生としてタニヤ・セベリカンガスが留学して来ている。彼女は異例で学部生としても数年前に本学に留学をしてきていたが、再度、大学院生

として留学をして来たのだ。

タニヤは偶然にも1度目の留学時に、最初の2週間程度を偶然、筆者の家で受け入れたことや、2010年にラップランド大学で実施したワークショップの通訳で助けられたことなど、交流があったことが、その後のプロジェクトに功を奏した。

徳地の堀四区まちづくりの会の人々は、かつての商店街で空き店舗になっているいくつかの店舗の中で、特に元呉服屋であった「まるしょう」を拠点に選んでいた。最初の全体ミーティングの時に、地域を見て回り最後にまるしょうにたどり着いた。そこでの印象は、正直にこのスペースでいったいどんなことができるのかと途方にくれるほどであった。なぜなら、しばらく放置されていたことと、インテリアが昔のまま、かなりの予算とボランティア的な労働が伴わなければこの空間は、我々が活動できるような空間にはならないと判断したからだ。

堀四区まちづくりの会と連動して活動している前田繁志が、拠点の名前とロゴを考えてほしいという要望を最初の会議に出された。そこで、筆者はフィンランド語を交えた名前にしようと提案したために、徳地を表す言葉で、語呂のよいフィンランド語を調査した。試行錯誤の上で太陽を意味するaurinkoアウリンコと館を意味するtaloタロと徳地を組み合わせ「アウリンコ・徳地・タロ」（太陽の徳地館）と命名したのだ。（以後場所を示す場合には愛称としてアウリンコと呼ぶ）

そしてタニヤにロゴデザインを依頼し、研究室内で合意を取り付け、名前とロゴを決定した。しばらく合同会議がないままに、研究室内では自分たちのスケジュールに合わせて計画を立て、地域の合意がないままに動いていたことが途中でわかった。当然、名前やロゴについてのコンセンサスもないままであったために、追認で地域の人々に認めてもらうということになったのである。

さらに、予算もまだはっきりと決定されないまま、準備期間の関係で、徳地で8月27日に行われる恒例のとくち夏祭りの準備が進められることになった。まず、徳地和紙の原料であるミツマタの皮が剥かれた後の木がたくさん保存されているので、それを使って旧商店街一帯に展示したいという要望が出された。

結論は、徳地和紙を使ったイルミネーションを、旧商店街に飾るという計画になった。そこで、空間デザインに興味をもっていた藤田幸司が照明装置を作成し、空間デザインも併せて提案することになった。

当初、長時間点灯することから生じる和紙の耐熱性など、照明機材において克服しなければならない問題があった。そこで、偶然に別のプロジェクトで話し合いを持っていた山口県産業技術センターの川村宗弘に相談したところ、徳山工業高等専門学校の教授伊藤尚を紹介された。伊藤は夏休みにおける研究室の引越いや緊急性のある研究活動を抱えている中で、LEDによる照明器具の構築の提案や技術指導を行った。そのおかげで、徳地手漉き和紙を使ったオリジナルのユニークな照明器具ができた。

詳細は2章で述べられるが、伊藤の寛容な指導なくしては実現されなかったこととそのことへの感謝をここで述べたい。その後、ヒンメリプロジェクトにおいても、継続して指導を受けている。

LEDによる照明を作成するワークショップが藤田の指導のもとで、地域の人々によって実施された。今までは大通りに一般的な提灯が飾られるだけだったのだが、路地になっている旧商店街に新しい光の空間が生まれ、またそれを地域の人が作ったということで、非常に好意的な反響が返ってきた。

同時並行でアウリンコ徳地タロの空間デザインを藤田が担当した。藤田は徳地に居住する住民の考え方や地域特性を理解するために、アウリンコに泊まり込み調査をした。夏祭りに続き空間デザインのための活動を通じて、徐々に堀四区の人々から学生たちが信頼され、双方に一体感が生まれてきたことが実感された。

10月22日に地域の人々の地域資源である徳地和紙への認識を新たにすること、さらにものづくりに興味がある人の出会いと発掘をするために、ワークショップを開催することになった。そこで参加者が全員共通に作成するエコバックとこれに飾り付ける和紙花のサンプルを浅田陽子が作り、ワークショップの指導をした。筆者は装飾にはその背景が必要だと考え、風呂敷から着想を得たエコバックを提案した。

さらに浅田陽子はニットに徳地和紙を組み込んだコースター、木村和枝は徳地和紙のマーブル染め、松永美代子はパッチワークによる額入りタペストリーな

どそれぞれのワークショップを企画し指導と運営を行った。これらは山口市と重源の郷の協力の元で実現された。

徳地発のファッションとして商品開発を実施しようと考えられていた袴パンツプロジェクトが武永佳奈によって計画された。10月23日にはアウリンコを会場にワークショップが開催された。

2日間に渡るワークショップに徳地内外の人々が多数集まり、交流を深めると共に改めて徳地手漉き和紙がすばらしい地域資源であることが参加者の間で体験された。ここで問題であったのは、この計画を進めるにあたり、堀四区まちづくりの会とのミーティングを一度も持たなかったことである。スケジュールや広報宣伝など、大学側が独走してしまい、地域との共同になっていなかった。

その原因は、まずワークショップなどの主催者である研究室のメンバーは、計画・実施に向けた準備、チラシ作成などに忙殺されていたことがある。また、ワークショップの個々の担当者がこの段階では徳地の担当者との直接的交流を持っておらず、プロデュースについての調整を十分にできていなかった。

チラシを作成するときに、共催者になってもらうことを確認する段階になって、やっとこのワークショップの内容を具体的に知らせるということになってしまった。この反省を踏まえて、その後のもっとも重要なアウリンコのプレオープニングに向けた準備のために、松原直子と筆者が堀四区の各自治会長と徳地観光協会会長などと、率直な意見交換の場を持ったことがその後有効であった。

そこで、堀四区を超えて徳地全戸にアナウンスをしようということになり、当初、プレオープンの行事を予定していた日程を、11月22日から12月4日に変更した。その後は、同じ理解の土俵が持ったことから、スムーズにことが運ぶようになった。特に、プレオープニングの展覧会に関する詳細は以下に譲る。簡単に言うと、地域で活躍する生活手工芸の作家を掘り起し、一同に会して展示することでまず地域の新しい創作活動を地域住民に知ってもらうことを目指した。同時に、プロとして活動しているのではなく、日頃創作活動をしている一般住民たちが関わったワークショップの成果を展示することで、新しい徳地発の商品開発の

可能性について考える機会ともなった。

上記展覧会で展示された袴パンツプロジェクトについては、最初から関心をもっていた徳地観光協会の前田繁志の仲介で、重源の郷で開催される写真大会で武永が作成した袴パンツとオリジナルTシャツを着た3名のモデルの撮影会が開催された。(写真2・3)
(資料①)

そして12月18日には当研究室主催のクリスマス・ファッションショーVol.8が実施されることになった。そこで、アートマネジメントを中心に研究活動をしている松原直子による「アウリンコ・徳地・タロ」を紹介するプレゼンテーションを企画した。それはパワーポイントによる画像のみならず、徳地の人々を舞台で紹介する内容であった。

このショーの鑑賞に徳地から30名の住人が参加した。このことを通じて研究室の活動内容が理解されたことは今後の共同活動にきっとよい効果を生むに違いない。バスでの行き返りの中で、徳地の住民と松原直子が意見交換などを行い、今までにも増して信頼関係や理解が深まったことは、この企画の成果である。

春からの短い期間ではあったが、ゼミ生6名の情熱的な行動によって、多様なプロジェクトを実現できたことは驚きである。また、地域住民もアウリンコにボランティアとして改装作業に参加し、見違えるように新しい空間が誕生した。徐々に徳地の関係者の間でもアウリンコが徳地ギャラリーとして位置づけられるようになってきて、拠点の機能に関するコンセンサスがとれてきた。

以下の本論は、筆者が監修し、創作研究した各メンバーがそれぞれのプロジェクトについて、記述しているものである。彼らの役割はそれぞれの部門の企画立案から運営までを行うことである。本論は服飾デザインとアートマネジメントの実践を記すとともに、その内容を検証することで中山間地域におけるアートマネジメントの可能性を考えるものである。(文責：水谷)

2. とくち夏祭りと徳地和紙イルミネーション

「徳地和紙イルミネーション」とは、2011年8月27日に佐波川の河原で花火が打ち上げられる「とくち夏祭り」において、その近くの旧堀商店街200メートルの道をデザインしたプロジェクトの名称である。

この作品は、徳地和紙において従来とは異なる捉え方を受け手に与えようと試みた。その方法として、和紙による照明製品はどのようなものが作られてきたか、今まで徳地和紙を用いた作品はどんなものがあるか、またベルギー出身のファッションデザイナー「マルタン・マルジェラ (Martin Margiela) (1957〜)」はプレゼンテーションに対してどのような捉え方をしているか、といった三つの視点から考えた。

特に、ここでマルジェラの考えを参考にした理由は、以下の2つである。第1に、筆者の修士論文の中で扱う対象であり、それを深く理解するために役立つと考えられるからだ。第2に、そのコンセプトである。マルジェラの衣服は、大量生産・大量消費の時代において、「時間」という要素を用い反抗的な態度を示す。また、展示というかたちでメッセージ性ある衣服を制作する。それらのような表現を基に、受け手に価値を見出させようとした。これらは、筆者がファッションを専門にしながら、この空間デザインを引き受けた理由でもある。

結論として、花のコサージュの形をした照明器具を作り、それを旧商店街通りに設置することにした。具体的なデザインについては、専門の文献、徳地和紙で実際に制作された作品やその写真などをインターネットで調査した。

まず、1章で紹介されたように徳山工業高等専門学校教授伊藤尚にLEDの構造について指導を受け、徳地の手漉き和紙を花卉にして、コサージュの照明の部品を作った(写真4)。そして、それらの組み合わせを52基、旧堀商店街に設置し、入口には巨大な4基を設置した(写真5)。さらに、その原材料が作られるミツマタの木を10個、原料になる皮がまだはがされていないミツマタの木を1か所に展示した(写真6)。木にかけてある和紙の札は、その木についているコサージュの和紙の種類の名を記してある。さらに、徳地地域と山口県立大学の出会いのきっかけの象徴として、徳地の古い着物でつくられた札がかけられた。この札は、「しおり」として制作し3つ展示された(写真7)。

「徳地和紙イルミネーション」は、これらすべてが通りに揃い作品として成り立ったものである。

出入り口からの作品の配置の流れは、「4店頭」に並

ぶ」←「3和紙を作る」←「2樹皮を剥ぐ」←「1刈る」→「2樹皮を剥ぐ」→「3和紙を作る」→「4店頭」に並ぶ」となり、徳地和紙の制作過程を表現している。出来上がるまでにかかった過程を示し、作品が完成するまでの物語を連想させることで、「時間」に価値を置かせた。つまり、このデザインは、通りを歩くことで「ものづくりには、長い時間がかかっている」といった雰囲気を感じさせるのだ。

「徳地和紙イルミネーション」とは、単体の照明器具をデザインし、オブジェとして展示するものではない。あらゆる形をしたコサージュの部品やミツマタの木、徳地和紙などにより、類似のものは作れるが、全く同じものは存在させるのは困難であるという意味合いを持たせて展示している。受け手に、今まで見てきたものでも見方を変えれば「一点もの」になるといった価値観を所持できる機会を提案させるデザインである。

実践的な制作にあたり、大規模な事業ゆえに学生や地域内外からボランティア約40人の協力を得て実現した(写真8)。毎年、この祭りでは、花火が主体でありそれが終了した後、多くの住民は、県道376号線を通って帰ることが一般的であった。それに比べて、今年はイルミネーションでデザインされた堀商店街に注目が集まり、花火の後の帰りに車1台が通れるくらいの狭い通りは人々で混み合い通れないほどであった。そこでは子供から大人までが作品の前で立ち止まり、観察したり写真をとったりなどして興味を示していた。

このデザインは、配置の流れに重点を置いた。しかし、個々のイルミネーションに関しては、誰でも簡単に生産できる構造であるゆえに、単体の技術力が低いという声も挙げられた。このような批判の声こそを大切にして、今後の装置を検討していく必要があるのではないだろうか。

今回のプロジェクトは、地域住民であるワークショップへの参加者がイルミネーションを制作したことによって、とくち夏祭そのものへの住民の参加意識が高まったために、研究室とのコラボレーションへのさらなる期待や信頼が生まれたことがその後の共同活動への大きなはずみとなった。(文責：藤田)



「徳地和紙イルミネーション」設置場所

3. アウリンコ・徳地・タロの空間デザイン

「アウリンコ・徳地・タロのデザイン」は、しばらく使われていなかった元呉服店の空き店舗を改装し、今までと異なる場所として活用するために行ったものである。本作品は、現段階で徳地地域にはないギャラリー機能を持ち、地域住民がコミュニケーションできる場所としても有益なものにすることが目的である。

デザインする段階で、まず考えたことは今までこのような改装事例はどんなものがあるか、徳地地域にはどのような文化遺産的な場所や公共施設などがあるか、ファッションブランド「メゾン・マルタン・マルジェラ」が衣服に関してどんな捉え方をしているか、といった三つの視点から考えた。その他、実際にその場所を使用する地域住民の声を聞くために、何度も徳地地域の施設に足を運んだ。また、これらのデザインに関する専門的文献も参考にした。

このデザインは、地域において特にひきこもりがちな高齢者や、一般の誰もが気軽に集えること、また、展覧会が行えることを主要な機能として考えた。まず、正面にあるショーウィンドーの縁やタイル看板、壁などを白色に配色した。床のタイルは、そのまま残すことにした。室内には、障子の衝立や畳などを配置し、奥の壁に障子を既存のまま残した。つまり、建物の前方において近代的な雰囲気を感じさせながら、後方に行くにつれてなじみやすさや古風な空気に触れられるように演出した。この地域の建築の周辺状況においては、近代的な建物が立っていく中で、まだ古い町並みが残っている。このデザインは、その時間の経過の表現により、このような過去のものを残していくべきことを示唆している。

「アウリンコ・徳地・タロのデザイン」は、地域住民が便利に使用できる施設にとどまらず、この作品により過去のもを大切にしながら徳地地域が発展していく、というその姿勢を価値あるものとして提案する行為である。

改装作業中には、筆者の考えが従来の徳地の雰囲気とは離れた印象を与えていたために批判の声も多かった。しかし、プレオープンから一週間かけて開催された展示会では、地域の作家達の作品と大学院生のワークショップでつくられた作品が展示されて、地域内外から来場者が多数あり、空間演出についても好評であった。この空間は、受け手に対して、親近感と疎外感を与えている。今後もこれらをバランスよく演出していくことで空間デザインを試み、その成果を今回と比較しながら検証したいと考える。（文責：藤田）



「アウリンコ・徳地・タロ」設置場所

4. ワークショップ「徳地手漉き和紙で豊かに生活を飾ろう」

はじめに徳地手漉き和紙の歴史を述べたが、その高度な技術は、現在でも徳地の伝統文化として継承されている。しかし、その技術を現在受け継いでいるのはわずか2軒となり、担い手は高齢者である。そのため、後継者を育て人材を発掘することが急務とされている。そこで、今回のワークショップでは、広く一般の人々にこの現状を報告し、徳地に伝わる素晴らしい紙漉の伝統を、地域で守り伝えていく事の重要性を訴えることにした。

また、徳地地域に在住で手工芸に興味があり、モノ作りサークルの中心となるべき人材の発掘にも重点を置いた。このことはアウリンコを拠点とし今後、地域住民自らで運営される地域コミュニティーの形成をも

目指すものである。地域住民が感性豊かに協力し合っ
て生活していけるコミュニティー形成の基盤を、モノ
作りを通して構築していこうというのが、今回のワー
クショップのもう1つの目的だ。これらを踏まえつ
つ、山口県立大学企画デザイン研究室の3人の大学院
生が講師となって、徳地和紙を使った様々な技法を提
案し、開催に向けての準備をすすめた。

まず会場は、山口市徳地深谷「重源の郷」を希望し
た。その理由は1日かけて行われるワークショップに
おける午後の部の選択コースとして、紙漉きを予定し
ており、この設備が整っているところは、「重源の
郷」の「白波」が最適であると、スタッフの意見がま
とまったからだ。

具体的な計画を進めるにあたり、当ゼミ生である武
永を通じて、徳地観光協会代表の前田繁志が、株式会
社ちょうげん事務長の古林一成にこのワークショップ
開催の旨を伝えていたために、交渉は容易に進んだ。

広報の方法としては、開催の趣旨と詳細を記し、申
し込み表を添付したチラシを500部作成した。このチ
ラシの作成にあたっては、有限会社防府カラー代表取
締役河合章夫の多大な協力を得た。このプロジェクト
に賛同した河合は、低予算で撮影やレイアウトを請け
負い、休日返上で締め切りに間に合わせた。そのため
配布予定日までにこのチラシは刷り上り、アウリンコ
プロジェクトとしてワークショップを印象付けるデザ
インのチラシが完成した。(写真9・10)

このチラシを徳地地区のみならず、山口市・防府市
近辺の主要な箇所に配布し、広範囲にわたって呼びか
けた。また、このアウリンコプロジェクトのリーダー
である水谷由美子や、ワークショップの各担当者が口
頭で勧誘を行ったり、筆者の開設するホームページの
ブログにおいて、ワークショップ開催の記事を掲載す
る等、様々な方法で参加者を募った。その効果もあ
って、遠くは北九州市や下関市、山陽小野田市、
防府市と、実にさまざまな地域からの申し込みがあ
った。

しかし、このワークショップの企画の段階で、本来
参加を募るべき地域住民との連絡が交錯してしまい、
開催に当たっての広報活動が十分に成されていなか
った。この件に関して、10月12日、徳地ふれあいの館
で、地域住民代表者10数名とゼミ生である木村、藤

田、武永そして浅田の4名との話し合いが行われた。
その会議で住民代表から、地域の回覧網を利用して
徳地地区全戸にチラシを配布することが提案された。
この案は、ワークショップのチラシに関しては時間的
に間に合わなかったが、後に行われたアウリンコプレ
オープンの広報活動に役立てられ、大きな成果とな
ったことを記しておく。

このような経過を経て、2011年10月22日にワー
クショップ「徳地手漉き和紙で豊かに生活を飾ろう」が
開催された。

当日は、山口県立大学の協力を得て、同大学の専用
バスが運行された。当ワークショップの担当者でもあ
る松永が同大学前から引率を行い、途中、徳地総合支
所前より徳地地域の参加者も合流するなど、大雨とい
う最悪の天候にも関わらずスムーズな送迎が行われ
た。

先ず午前の部で、徳地和紙の歴史と現状をゼミ生の
木村が発表した。その後、1)和紙で花びらを形成し
た和紙花とエコバッグを参加者全員で作成した。途
中、親睦を兼ねた昼食会をはさみ、午後の部では、
2)自らが漉いた和紙にマール染めを施した葉書
3)和紙を用いたパッチワーク技法を用いた額入りタ
ペストリー 4)編地に和紙を挟み込んだコースター
の3つのプログラムが用意された。これら3つの中
から参加者が1つまたは2つを自由に選び受講する
という構成で、ワークショップが進められた。

以上のようなスケジュールにそって、参加者は多
面的に徳地和紙の魅力を体感し合い、皆で制作の喜
びを味わい、秋の1日、ものづくりを通しての一期
一会の出会いを楽しんだのである。以下では各ワー
クショップについて、担当者が具体的に記述し、その
意義について考察を行う。(文責：浅田)

1) エコバッグと和紙花(参加人数：29名)

和紙花担当：浅田陽子 エコバッグ担当：松永美代
子・木村和枝

現在、徳地和紙を用いて制作されているものとし
て、先ず和紙人形が思い出される。この作品は見る
からに精緻で、技術的にも難易度が高く、手仕事に
自信がない人にとっては作るものではなく、見るもの
という印象を受けるようである。

筆者の考えとしては、地域資源である徳地和紙をより深く理解するためには、まず和紙に直に触れ、細工し、小さな作品でも構わないので、とにかく何かを作る、という行為が重要であると思われた。

そこで、今回のワークショップでは、手工芸の制作に自信のある人から、自称「不器用」な人まで、誰でも容易に作成でき、徳地和紙の強度と質感を体感しつつ短時間で作成できる生活雑貨を提案した。

まず午前の部で紹介した和紙花は、1人6枚分～8枚分程度の花びらを準備し「折る→縫う→絞る」の工程を示し、後は参加者の感性に合わせて制作していく方法を進めていった。和紙は、時間の関係で、予め適当な大きさに切りそろえた徳地手漉き和紙の「ぼかし染め」を準備した。

途中、参加者でもある幼稚園教諭の提案で、制作時に出た紙くずを、園児達の切り紙遊びの材料として持ち帰ってもらう事となった。このようなエコを意識した展開を、今後の活動にも役立てたいと思っている。

次に花芯の部分は、各自のオリジナリティーを発揮できるように十分な下準備をした。例えば、カラフルな糸玉や様々な種類のビーズやウッドビーズなどであるが、それに加えて、予め参加者に思い出のボタン等を持参するように要請した。このようにさまざまな素材を自由に合わせ、ボンドで形成して和紙花を完成させていった。特に糸で編む独特の糸玉は人気が高く、13名が順に編み方の指導を希望し、筆者はそれに応えた。

この和紙花については、参加者が予想以上にアイデアを積極的に出し合ったために、実にバラエティー溢れる作品が仕上がった。特に小学4年生の児童や男性参加者の作品は花びらを二重に組み合わせたり、花芯の部分の配色が実に美しかった。それぞれ独自の工夫がなされ、これにはスタッフ一同、ただただ感心するばかりであった(写真11)。

後に行ったアンケート調査では「制作が特に楽しかった作品は…？」の問いに、この和紙花の人気が一番高かった。その理由としては、最も難しいと思われる花芯部分の制作工程を、ボンドで接着する、という極めて手軽な方法を用いた点と、出来上がりの印象が色彩的で美しかった点などが考えられる。

そして午前の部の最後に、その和紙花を取り付けて

コーディネートして楽しむためのエコバッグを紹介した。このアイデアは、当アウリンコプロジェクトのリーダーである水谷由美子の提案であった。和紙花を飾るための背景としてのバッグの役割も兼ね、エコバッグの制作を取り入れたのである。

和紙花が十分に美しく映える様に13色の布(110cm四方)を用意し、あらかじめ端ミシンを施しておいたものを準備し、「畳む→結ぶ」の工程を示して、仕上げていった(写真12)。このエコバッグは一枚の布を6箇所結ぶだけで簡単に出来上がり、持ち運びが楽である点と洗濯が容易である点が、参加者の間で特に好評であった。

出来上がったものに和紙花を飾り、うれしそうに作品を見せ合う参加者の姿がとても印象的であった。それは、飾るという要素と使うという要素が十分に盛り込まれていたからだと推察できる。さらに筆者が感動したのは、それぞれ作成した作品が、みな素晴らしい色彩のコンビネーションであり、花とバッグが実に見事にコーディネートされていた点である(写真13)。

その後の聞き取り調査でもワークショップ後、この和紙花を作成した人が多く、筆者としても想像以上の反響に驚いている。今後の課題としては、この和紙花の作品にさらに改良を加え、完成度の高い作品を多くの人々に紹介することによって、徳地和紙の魅力を広くアピールできるのではないかと考える。

(文責：浅田)

2) 手漉き和紙のマーブル染め(参加人数9名)

担当：木村和枝

筆者はビーズを使用して、ジュエリー制作を創作活動の主眼において15年活動を行ってきた。当大学院への入学後に行った実習を経て、地域資源である美祿の大理石と徳地和紙を活用した創作活動を行うようになった。それは、徳地和紙を使った「こより」と美祿地域の大理石を組み合わせたペンダントである。「こより」は化学繊維が普及する以前には、日常生活の中で、本を綴じるとき等に広く使われていた。その他にも生活の中で「紐」として使われていた。

そこで発想を転換させ、日常に使われていた「こより」を装飾品に使用してみようと考えた。地域に暮らす古老に指導を受けて「こより」を作った。この徳地

和紙の「こより」と美祢の大理石を組み合わせた装飾品の改良を重ね、商品として開発していくことを目指した（写真14・15）。

筆者は2010年の冬と2011年の夏に2度、フィンランドで研修したことで、フィンランドデザインに強く影響を受け自然素材と自然界からの力に多くのヒントを受けてデザインしている。特に自然素材を活かしつつ、地域に根付く伝統を大切にする価値観を、新しいデザインに取り入れている。具体的には、自然素材である大理石と伝統的素材である徳地手漉き和紙を組み合わせることで新しい作品を試作中である。

この度、中山間地域活性化事業のプロジェクトが始まり、何のワークショップを受け持ちどのような物をどのような方法で行い、またその担当を誰が行うかが課題であった。

そこで筆者は、制作している大理石のことを思った。大理石を英語でいうときはmarble（マーブル）という。大理石は物によるが、時として自然にできた美しい模様の石を見ることがある。この美しく偶然に地中で作られる、自然界の模様を徳地和紙で作ることはできないだろうかと考えた。

マーブル染めは、古くは9世紀に始まり尾形光琳の紅白梅図屏風にも使われている墨流し技法で、世界の各地で見ることが出来、イタリアのマーブル染めが特に有名である。昔から現在までジャポン紙（日本の和紙）、チャイナ紙（中国紙）、西洋紙の順に高級で美しく長持ちするとの評価がある。和紙は300年を経ても使用可能なほど丈夫だが、西洋紙では手漉き紙でも300年たてばかなり変質すると一般的にはいわれている。

和紙を使ったマーブル染めに挑戦する機会を与えられた手漉き和紙工房では、墨流し技法の和紙制作とぼかし技法を使った和紙制作は行われていたが、マーブル染めの技法は行われていなかった。この工房で筆者が行った試作がきっかけとなり、マーブル染めを使った新商品開発が試みられようとしている。

筆者は、マーブル染めを紙漉き体験と組み合わせることが、和洋の技法を融合させることになり、新しい表現方法に繋がる試作になるのではないかと考えた。

マーブル紙を調べていくと、西洋の家庭では、大切な人へのプレゼントを世界でたったひとつの物という

意味をこめて、マーブル紙で包装して贈る習慣がある。それを、今回のワークショップで葉書をつくることで表現しようと考えた。

参加者は小学4年生から70代まで幅広い年代の参加があり、全員が初めての体験であった。秋の気配が近づいている山あいの里での徳地和紙を使った1日であり、参加者、指導者ともに森林浴をしているかのようなどとも気持ちの良いワークショップであった。

和紙の原材料が入れてあるふねと呼ばれる入れ物や紙漉きのための道具など、参加者は初めて見る道具に接して、紙漉きが産業として受け継がれてきたことに興味を惹かれたようであった。また、この地域で古くから行われている紙漉きが細々とではあるが、継続して受け継がれてきたことが使い込まれた道具からも知ることができ、感慨深かった。

個々に制作した手漉き和紙の葉書を乾燥後にそれぞれが作ったマーブル液で染めた。液の中につけて葉書が液を吸うとまるで魔法のように液は跡形もなくなり、液の入っていた容器にはただの水だけが残る。そっと葉書をひきあげると、和紙の手漉き葉書が模様を吸い込み、その人だけの模様がその葉書に写る。その瞬間、参加者の間から歓声と驚きの声があがった。マーブル染めの葉書を乾燥させると、色が更に変化する。それもまた驚きの事柄であった（写真16・17）。

参加者からはまた違う大きさの和紙でマーブル染めをしてみたい。という意見もあった。今まで経験したことのない手わざの楽しさに改めて気付き、自発的に手仕事に積極的に関わることのきっかけを作ることができたのではないだろうか。

この日制作したマーブル染めの葉書7点はアウリンコ・徳地・タロのプレオープニングの展覧会にて12月4日から12月11日まで展示された。期間中は葉書の製作者を含めて徳地地域のみならず、近隣の住民も多く見学に立ち寄った。見学者の感想は概ね好意的であり、手作り心を誘うようであった。何よりも身近な人が作ったということが好意的に捉えられたのではないだろうか。

反省点として、このワークショップ開催の広報活動をもう少し早い時期から行っていけば、もっと多くこの体験型ワークショップの参加者があったのではないかと思われる。

このような1日ワークショップを今後とも定期的にテーマを決めて行うことで地域を活性化させ、そこに暮らす人々が元気になればと思う。

ワークショップの会場となった「重源の郷」の紙漉き工房の担当者にとってもマール染めは初めての体験であり、今後新たにマール染めに取り組みたいという意見を聞いた。先に述べたように筆者が紙漉きの訓練をした技術保持者の紙漉き工房千々松製作所でも同じように新たな表現の方法として、マール染めに取り組みたい言う声を聞き、今回のワークショップが地域の活動に刺激的な新しい表現の動機づけがされたことは、ひとつの成果であった。

このようにワークショップを行ったことで参加者を含めて、このプロジェクトに関わった関係者にとって様々な発見をもたらすきっかけの一助となったのではないだろうか。

筆者は表現者として今後もこのような地域住民を対象としたワークショップを行っていきたいと考える。

(文責：木村)

3) 額入りタペストリー制作 (参加人数13名)

担当：松永美代子

筆者はワークショップの午後の部でパッチワークコースを担当した。

筆者の活動は、まず日本の伝統と海外の伝統などを共存させて、一枚の布に縫いつないでいくこと。パッチワークの持つ結合の可能性を利用して地域資源や人のところをつないでいくこと。そして手の温もりの造形を普及していくことをコンセプトにしている。

本来ならパッチワークでは、布と布とを縫いつないで、中にドミット芯と裏地をつけてキルティングをほどこし、作品を仕上げる。今回の「額入りタペストリー」は、パッチワークの中に地域資源である「徳地手漉き和紙」を取り入れることにあった。そのことで和紙の活用の幅を広げ、多くの人々に地域資源の良さを再認識してもらいたいと考えた。

平安時代末期、東大寺再建のため良材を探し求めた重源上人がたどり着いた杣(そま)の里、つまり重源の郷が徳地である。山口県の物産が奈良の東大寺の歴史に深くかかわっていた事がわかる。

「杣」とは材木の茂る山、木材採取の山の意から転

じて、伐採作業、さらには伐採、造材に働く「杣人(そまびと)」の名称ともなった。古代文献にある「杣」はおもに寺社・宮殿の用材伐採地を示している。

筆者がはじめて徳地を訪れた時、重源上人のことや山々の雄大な美しさ、涼しげな川のせせらぎ、疎水の清らかさが特に印象に残った。夏から秋へとフィールドリサーチを続けるうちに「杣里(そまり)の四季」というテーマにたどり着いた。

タペストリーの制作にあたって、徳地手漉き和紙と古い着物地を組み合わせ、「杣里(そまり)の四季(秋)」をテーマに小さなタペストリーを制作することにした。このワークショップの作品は、杣里の四季ごとに額の中のタペストリーを入れ替えることによりそれぞれの四季を楽しむことができる。また、額については、住宅事情や壁の大きさなども考慮に入れ、14cm×14cmと25cm×20cmの比較的小さな二種類を選んだ。

参加者に自由な選択とデザインのわくわく感をもたせたいと考え、三つのコース①インディアン・ハッシュのパターン②柿の葉・バージョン③プラタナス・バージョンを提案した。②③についてはプラタナスと柿の木からの落ち葉をヒントに作成したオリジナルデザインである。色合いや布選びはもちろん、デザインや配列など独自の個性が発揮されて、一人ひとりの工夫がみられた。参加者のそれぞれの工夫の具体的な例として、徳地手漉き和紙を使った「こより」のオリジナルなあしらい、波や水をイメージしたキルティングのほどこし、落ち葉の虫食いなどが表現されていた。子どもの頃のままごとを連想した参加者もいて、自分の感性を再発見したり、もの作りに対する自発的な興味や関心が高まったのではないだろうか(写真18)。

アウリンコのプレオープンに、ワークショップに参加した人々の作品を展示した(写真19)。展示期間中は多くの人が見学を訪れ、徳地手漉き和紙をタペストリーに取り込んでいることに関心を寄せ、地域資源の活用性について再認識した様子であった。また、筆者もプレオープンにあわせて、自作のお祝いキルト「寿ぎ(ことほぎ)」を展示することができた(写真20)。素材として、徳地手漉き和紙と古い着物、そしてフィンランドを代表するテキスタイルとファッション

ブランドであるマリメッコの布を組み合わせたタペストリーを制作する初めての試みであった。オブジェの土台であるペディストールは、徳地和紙の原料であるミツマタを使用したデザインである。筆者は、このオブジェの土台制作をオーダー家具の制作を専門に徳地で活躍している若手・手工芸作家の小松直樹に依頼した。

この「寿ぎ」の組み合わせは、2010年11月、筆者がフィンランドラップランド大学のワークショップに参加した時の経験に基づいたものである。水谷由美子とラップランド大学の教授マリヤッタ＝ハイッキラ ラスタスの指導により、ラップランド大学から8名、山口県立大学から4名がワークショップに参加した。参加者は3名ずつ4つのグループに分かれ、それぞれのコンセプトで作品を制作した。筆者のグループでは、リビングルームの生活小物をテーマに、カーテン、クッション、タペストリー等を制作した。山口県の地域資源であるデニム、柳井縞、徳地和紙、竹の加工品、そして、フィンランドのフェルトを組み合わせた作品がそれぞれ出来上がった。いずれも、初めて使った素材であり、筆者の創作活動に幅もでき、素材へのこだわりが強まった。また、フィンランドは、森や湖、澄んだ空気や清らかな水、純粋で素朴な人々など徳地との共通点も多い。

12月18日に行われたクリスマス・ファッションショー Vol.8に「サーミの宇宙」というタイトルで作品を発表した。この作品の中にも、地域資源である徳地手漉き和紙を現代のファッションに生かしたいと考え、デザインに取り入れた（写真21）。

今回のワークショップの課題は、時間的な余裕がなく打ち合わせや各自のスケジュール調整が不十分であったことから、幅広い周知活動ができなかったことがあげられる。今後は、これを踏まえより計画的な取り組みを行いたい。（文責：松永）

4) ニットコースター（参加人数：12名）

担当：浅田陽子

このコースでは、筆者の一貫したテーマである「帰森（きしん）」を作品のコンセプトの中に盛り込み構成していった。「帰森（きしん）」とは、人々がぬくもりを求めて帰郷するように、森に帰ってゆくという

コンセプトのもとに作った造語である。具体的には、綿・麻・コウゾ・ミツマタそしてガンビなど、すべて植物繊維の素材を用いた作品を発表することにより、自然回帰、ナチュラルな生き方を提案し、さらに地域資源である徳地和紙とニットの融合を図った創作活動を目指している。

以前より、筆者は個展形式でアートニット作品を発表しており、その空間構成の一部として徳地の手漉き和紙を使用していた。今回のワークショップではこの発想をさらに展開させていき、はじめてニットと和紙の融合した作品創りを試みた。

ワークショップで制作したニットコースターは、素材にアクリルとレーヨンを使用しているため、この「帰森（きしん）」のテーマ（天然植物素材使用）からは外れるが、風合いの面白さを重視し、糸メーカーのニッケ株式会社が製造している糸を使用した。

その糸を用いて方眼に編んだ編地の中に和紙を挟み込み、ニットと和紙との融合を図った初めての作品である。柔軟性のあるニット地に、手すき和紙を組み合わせる事により、独特の質感を作り出し、筆者の専門分野であるアートニットの表現方法に新たな可能性を提示した作品である。

先ず、徳地和紙の中の染め和紙11色を用いて、染めならでは色の柔らかさをワークショップの参加者が体感できるようにデザインし、さらにベアーで使用できるように2枚のコースターの制作を計画した。

時間の関係から、本体の方眼編み（13cm×13cm）は筆者が準備し、参加者はその編地に色遊びを楽しみながら、染め和紙を「畳む→挟み込む」の工程で仕上げていった。それに加えて、2種類の鎖編みの紐を織り込む方法「編む→刺す」を示し、かぎ針編みの技法も取り入れた。染め和紙や鎖編みの色の組み合わせ、挟みこむ位置や方法などで、参加者はオリジナリティーを十分に発揮し、時間内に全員が2枚のコースターを仕上げ、皆で完成の喜びを味わうことができた（写真22）。

出来上がった作品は、折りたたんだ和紙や鎖編みを挟み込んだだけなので、別の和紙や布テープを用いれば全く違った雰囲気の商品に仕上がり、季節によって変化させられるという利点がある。今後、各々のイマジネーションをさらに刺激できる作品となった。

さらに、この方法を用いて共同作品であるニットコラージュのパーツ制作の協力を参加者に依頼した。かつて徳地では、冬の手仕事として、どの家庭でも紙漉きが行なわれていた時代があった。この作品は、「古(いにしへ)」というタイトルで、雪で覆われた徳地の冬をイメージし、植物素材の編地に和紙を挟み込む事により、自然豊かなこの地に脈々と受け継がれてきた、手漉きの文化を表現しようとしたものである。今回のワークショップに参加した人々との、一期一会の証しとしてのコラージュ作品なのだ。

またこの共同作品は、12月4日に開催されたアウリンコのプレオープンで展示された。作り方は、コースターの制作過程とほぼ同じで、予め用意してきた編地に、今度は色和紙ではなく、白色や生成りのバリエーションで、自由に和紙を挟み込むものである。作品のパーツ制作は参加者に依頼した。当初はひとり1枚の作成を予定していたが、予想以上に積極的な参加がみられ、参加人数分以上のパーツが完成した(写真23)。

この際、挟み込んだ和紙の端の始末を切りっぱなしにするなど、参加者からの面白い提案があり、それらを取り入れることで、共同制作としての意識を高め合うことができた。「完成が楽しみ…」と言う声が多く聞かれ成果があった。

この作品は、12月3日に完成し、翌日のアウリンコのプレオープンに展示した(写真24・25)。このときに、多くの来場者に観賞され、さまざまな意見や解釈を得た。特に、個人個人が制作した小さなパーツが複数結集されてひとつの大きな作品ができ上がるという制作工程と、テーマに徳地の歴史が盛り込まれている点が共感を得ていた。

以上のように、今回のワークショップにおいて、筆者は初めてニットと和紙との融合を図った。この質感は今までにない新鮮な表現方法であり、筆者自身の創作活動へ大きな影響をもたらしたと言える。

その成果として、12月18日に開催されたクリスマス・ファッションショーVol.8にて、和紙を用いたニット作品(メンズのプルオーバーとレディースのワンピース)を発表した(写真26)。タイトルは先にも述べた「帰森(きしん)」である。これらの作品も全て植物繊維を用い、自然回帰を提案している。今後も、筆者のテーマである、「ニットと和紙の融合」をさら

に展開させ、新しいテキスタイルとして県内外および国外にも広くアピールしていきたいと考えている。

最後に今回のワークショップの総合的なまとめとして、アンケート調査や対面式での聞き取り調査の結果を記しておこう。

まず、地元徳地の人々からは、①手漉き和紙の事は認知していたが、扱いにくそうで敬遠していた ②モノ作りを行う事によって、和紙を身近に感じられるようになった ③これからも様々なワークショップの開催を希望する、等の意見が寄せられたことで、今後のアウリンコのプロジェクトの基盤が固められたと確信できた。

また、徳地以外の参加者の声としては、①徳地和紙はほとんど知らなかったが今回のワークショップにて新たに認識した ②徳地だけではなく様々な地域においても、このようなワークショップを開催して欲しい、等の意見があった。いずれにしても、もの作りにおける魅力ある素材として、この徳地手漉き和紙を、参加者のみならず、多くの人々へ提示できたのではないかと実感している。

この様に、当初の目的であった「徳地の人々の地域資源である徳地和紙への認識を新たにすること、さらにももの作りに興味がある人の発掘と出会い」という点において、確実に達成できたのではないかと考えている。(文責：浅田)

5. 袴パンツプロジェクト

「袴パンツプロジェクト」は徳地地域に新しい経済活動の場を作る試みである。つまり、「袴パンツ」の商品化を目標とするものである。袴パンツは、徳地地域の農業を中心とする昔ながらの生活の価値や魅力を再認識してもらおうためのツールでもある。制作は、地域住民と共に行う。そうする事で、途絶えつつある服作りに関する地域産業を繋ぎとめる事を意図している。

モンペに注目したきっかけは、徳地地域で見たモンペを身につけ仕事をする人々の姿に新鮮さを感じた事に由来する。その後、徳地地域におけるモンペの実態を調査したところ、現地のスーパーマーケットにモンペの特設コーナーが設置されている事から、地域住民にとってモンペが日常的に身近なものであると知っ

た。そんな中、地域の家庭で製作されていたモンペの紹介を受けた。

そのモンペは、一般に市販されるモンペとは異なり、ウエスト部が紐状で、タックでゆとりを取っていた。外観からは、野良着を超え、折りや結びを活かした日本のパンツという印象を受けた。この印象から、海外への発信も視野に入れ、モンペの元であり、日本の伝統衣装である袴に着目した。

袴パンツという言葉は自然派ショップやアジア雑貨店で取り扱われる、リネンやインド綿を素材としたパンツを指す言葉として使われている。これは、袴特有のゆとりや裾広がりシルエットを持ったパンツを表している。

その他にもヨウジ・ヤマモトやコムデ・ギャルソンなどのDCブランドが袴をモチーフに発表したパンツを示す言葉としても使われる。これには、タイパンツなど、袴以外のアジア諸国のパンツを参考したと考えられるパンツもある。それらを含め、袴パンツと呼ぶ事から、アジアの衣服の平面的な構造を表しているとも考えられる。

当プロジェクトにおける袴パンツは、東南アジアのパンツの構造も参考にしている事から上記した両方の表現を含んでいる。そこに、徳地地域における地域性という意味合いを持たせ使用しているが、複数の商品が既に存在しているため、商品名としては検討の必要がある。

着物を素材にした事は、筆者が服飾作品のテーマ設定を考えていた時と同時期に関わった、徳地地域の古民家再生事業に関連している。特にここでは、古民家から多くの着物が捨てられている現状を知った。古くから受け継がれる生活の価値を問いかける、という点において、袴パンツを構成する素材として着物は適していると考えた。

近年、インターネットの普及により、都市が身近になった影響を受け、地方のもの作りに対する需要が薄れている。現代は、地域でのもの作りが難しい時代であると言える。地域での活動に苦戦する作り手の特徴として、各自が個々に活動を行っている事を問題視した。持続可能な地域のもの作りを模索し、地域のネットワークを活かしたもの作りを意識し始めた。

袴パンツを制作する「袴ワークショップ」を2011年10

月23日にアウリンコで行った。その目的は、共に活動する仲間を見つける事や徳地地域の魅力を再認識してもらう事である。また、物作りに対する意識や意欲を高める試みでもあった。その方法として、住民の技術と地域の特色を取り込んだ物作りの一つのモデルを提示するワークショップを行ったのである（写真27・28）。

ワークショップには井上ミエ子、市川環、伊藤布沙子、品川名緒子、松永美代子の5名が参加した。松永以外の4名は徳地地域の住民だ。終了後、参加者から、もの作りに対する意識が高まった、新しい創作意欲が生まれた、との声が上がリ活動目的を達成出来たと感じた。

また、ワークショップは普段、各々の場所で活動する住民達が出会う場ともなり、新しいネットワークを作るきっかけとなった。同時に、アウリンコの必要性も再確認出来た。

袴パンツのパターンは、着物の裁ち方から直線を意識し、着物の生地幅を基準に制作した。タックをウエストに対し斜めに取り、脇は縫わず、股下部分のみ繋いだ。これにより、裁断における無駄布が減り、サイドを面で構成出来、着物の柄を活かした。ウエスト部は紐状にし、後ろに出来た結び目にバックの生地をかける事で、袴の枕を思わせるラインを出した。幅広い体型に対応出来る構造である。更に西洋のパンツの要素であるポケットを取り付け、現代の若者にも親しみやすいデザインを目指した（写真29）。

素材に使った着物は、制作意図を伝え、協力を申し出てくれた地域住民から提供を受けた。生地自体の価格ではなく、地域で受け継がれてきた事を基準に着物の価値を捉えた。そのため、着物の種類は問わない。そうして集まった着物をとき、材料として使用した。

古い着物を使用するには課題があった。主に洗濯時の縮みをさける事、長期の保管で染み付いた樟脳の臭いを和らげる事、そして虫食いや脆さなど生地の消耗に対する配慮である。また、着脱の難しさも袴パンツの課題の1つであった。

縮みと樟脳の臭いに対しては、着物を解いた後でネットに入れ、洗濯機で洗いをかける事で対応した。洗濯時にかかる付加を生地の段階で加える事で、生地が縮みきった状態でパンツを制作する事が出来た。洗剤の消臭効果により、樟脳の臭いも和らいだ。

虫食いは、広範囲に広がるものもあり、その部分を避けて使用する事が難しかった。また、構造上強い力のかかる部分を着物だけで作る事は懸念された。対応策として、丈夫な裏を付ける事が出来る、リバーシブルの形を採用した。

裏地には、皺がつき難い化学繊維を選んだ。伸縮性を持ったスムーズ地である。伸びる生地は、紐を結んだままの着脱を可能にした。

しかし、縫製においては、スムーズ地と着物地の性質の違いにより、生地を引っ張りながら縫うなど、特殊な技術が要求された。初めて扱う生地に苦労した結果、本来であれば1日で終わるはずのワークショップが2日間に渡って行われた。

袴パンツは、地域住民が縫製を担う事で、その作業技術や時間に見合った報酬を受け取る。これが、袴プロジェクトにおける経済活動の意図である。扱い難い生地を使う事は、質の悪さや作業効率の低下に繋がり、制作コストと販売価格の面において検討の必要性が生じた。

しかし、ワークショップ後の制作者の会話からは、扱う事の多い綿素材なら整った制作が出来る、という自信が感じられた。再挑戦させて欲しいと言う声も上がり、実力を発揮しきれなかった事が逆に、今後の意欲を高める結果に繋がった。

アウリンコのプレオープンイベントでの展示では、訪れた来場者の数名から注文を受ける事が出来た。制作過程に価値を感じた事が購入の理由である。素材の問題を見直し、ワークショップを重ねる事で、地域の経済活動に結びつけられる可能性が十分にあると実感した展示となった(資料2)(写真30)。

(文責：武永)

6. ワークショップ「フィンランドの伝統装飾ヒンメリ」

山口市徳地地域の周辺は、緑豊かな山々と豊富な水量の佐波川の恵みから形成された美しい森と湖がある。全国44ヶ所の森が「森林セラピーロード」として認定されている中の一つとして山口市徳地大原湖周辺が認定されている。また、佐波川沿いには、多数の石風呂の跡が見られ、特に国指定重要民俗文化財である岸見の石風呂は徳地を代表するサウナ文化の痕跡とし

て保護され伝承されてきた。

北欧の国フィンランドは、無数の湖が点在し、国土の約4分の3は森林に覆われている。そして、フィンランドの人々の生活に最も浸透している生活スタイルにサウナがある。フィンランドはサウナ文化の発祥の地であり、フィンランドの人にとってサウナは生活になくはならないものである。

双方の関係は、自然の形態と生活文化において、相対的に類似しているため、筆者の研究室では、徳地地域に伝統的なフィンランドの生活文化の様式を取り組み、他の森林セラピーを推進している地域とは違った、独自のイメージを確立できないかという模索がはじまった。

そこで、山口県立大学大学院交換留学生である、タニヤ・セベリカンガスの指導により、フィンランドの伝統装飾であるヒンメリを作るワークショップをアウリンコで開催した。ヒンメリの材料には、徳地地域で栽培された、麦わらの茎の部分を使用した。フィンランドでは、凍った湖に生息している、ストロー状の形を持った植物やライ麦等を利用し、ヒンメリを制作する。

2011年11月15日の徳地堀四区の自治会の回覧にワークショップ参加者を募集し、11月27日には徳地堀四区と庄方からの12名が、タニヤの制作したヒンメリの見本を見ながら午後13時から17時まで共同制作した(写真31)。制作の準備として、まず、麦わらの皮を取り除き、割れていないストロー状の部分だけを準備した。均一な造形に仕上げるために、麦わらをはさみで切るのだが、この時、事前にお湯に浸し、切れ目の部分が割れないようにする工夫が不可欠だった。切りそろえた麦わらに長い糸を通し、まずは、三角形を作る。同じ糸に順次に麦わらを通し、三角すいを作った(写真32・33)。

今まで見た事のない、外国の装飾に初めは戸惑いもあったが、実際に作ってみると意外に簡単なことから、各自思い思いの形に仕上げていった。外国人に、創作を教わったことが初めての参加者も、フィンランドの生活文化についてタニヤに教わりながら交流を深めた。訪れた事のない北欧の地に思いを馳せながら、たくさんの三角すいの立体を完成させていき、最終的には、窓のショーウィンドウの外から見える部分に、

ヒンメリを展示した。

参加者の徳地在住の女性は、「みんなでワークショップを楽しんだ。感動的な形の造形が作れることが衝撃的な発見でした。そのかすかにゆらめく姿を他の素材で作したかったので、当日自宅に帰宅した後、カラフルなストローや、生け花で以前使用されていた『とくさ』と言われるものを用い自分流のヒンメリを制作した。翌日、アウリンコにその作品を持っていったところ、好評で、他のワークショップ作品と一緒に展覧会のために展示した」とインタビューに答えた。

ワークショップに参加した地域住民は、国際交流を交えた大変刺激的なヒンメリの制作活動について、非常に好意的であった。今後、このヒンメリをクリスマスだけの装飾飾りとして考えるのではなく、とくぢ夏祭りでも展示し、徳地地域発の独自のオーナメントとして、創造し普及していくことが可能かもしれないと期待されている。海外の伝統装飾を日本文化と上手く融合させ、地域らしさをそこに定着させることができれば、長く人々に愛されるものになっていくかもしれない。今後もこの企画を継続し、地域の中から作り方や、アレンジの仕方を指導できるような人材育成にも力を入れていきたいと夢は膨らんでいる。

(文責：松原)

7. 「アウリンコ・徳地・タロ」プレオープニングの展覧会のためのアートマネジメント

(1) 中山間地域におけるアートマネジメント

はじめに記述された通り、山口市徳地地域は、山口県のほぼ中央に位置し、北部には中国山地があるため、約9割を森林が占める。その豊かな森から、約800年前に東大寺再建の用材は伐り出された。徳地地域には、その偉業を指揮した重源上人に関する史跡や史話が今でも数多く残されている。徳地観光協会は、こうした地域の特色を観光資源として視野に入れながら、商店街の景観の美化活動にも着目していた。そこで、筆者は商店街の店舗を再利用し、アートマネジメントすることで、そこに住む人々が集える交流の場が生まれ、ひいては地域の活性化に繋がるのではないかと考えた。

アートマネジメントとは、単に芸術家やアーティストを、芸術組織である美術館やギャラリー等でどのように扱い、その活動を管理運営していくのかという視点にだけ立っている訳ではない。広範囲にわたる文化芸術活動の側面が、日本の都市の文化政策や公的機関である地方自治体、民間企業、NPO団体等の活動に影響を与えるのではないだろうか。

アート活動による自己表現の創造性や多義性が、現代社会の抱える中山間地域の課題を解決する手立てにならないかと模索しながらこの事業を開始した。筆者の研究室では、徳地堀四区まちづくりの会の協力のもと、拠点となるアウリンコを中心に徳地地域の芸術や生活文化を発掘・創造・伝承・発信をしながら、そこに住む人々が心豊かに生活を送れるスペースを提案していく試みが始まった。

(2) 徳地におけるアート活動の現状と展覧会の計画・運営について

まず筆者はアウリンコの存在を徳地地域の住民、また市内外の人々へ周知するために、プレオープニングのイベントとして展覧会を企画した。

徳地地域には魅力ある何人かの手工芸作家のアトリエ、工房、ギャラリー等が点在している。そこで、その作家の活動内容をまとめた形にし、地元の徳地の住民に知らせることにした。

今回の展覧会では、ジャンルの違う4人の若手・手工芸作家に焦点を絞り、この作家達の活動や作品を一堂に集約し、ボリュームを持って展覧会作品として紹介することにした。それぞれ異なった作家の個性は、展覧会にメッセージ性の強い徳地らしさをアピールすることができると思った。

同時に、先に行なわれた山口県立大学大学院生による、地域住民参加型のワークショップで共同制作した作品も同時に展示に組み入れた。なぜなら、ワークショップにおける市民の作品を見ることで、徳地に暮らす住民や展覧会を訪れる市内外の人が、徳地和紙や古布などの地域資源に親しみを感じ、その価値を再確認することができると思ったからだ。また、会場で作品を観ながら人と人との交流が生ま

れることも展覧会での1つの狙いであった。

しかし、展覧会の具体的な企画や運営方法は、必ずしも容易には進行しなかった。今回の事業では、筆者の研究室と徳地堀四区まちづくりの会との連携が重要であったが、展覧会の直前まで基本的な方針が双方ともに決まらなかった。

2011年11月8日、アウリンコに、徳地堀四区の自治会長、まちづくりの会の会長と役員、水谷由美子と筆者が加わり、協議の場を持った。お互いがそれぞれの思いを伝え、この組織の全体像を確認し合えたことが、展覧会の開催に向けての大きなステップになった。

それから開催日の12月4日までの約1カ月間、山口県立大学大学院生に加え、徳地堀四区まちづくりの会の共催のもと、多数の地域住民のボランティアや、手工芸作家の協力により準備は進んでいった。作品展の前日は朝早くから、堀四区を中心とする近隣のボランティアが約20人集まり、搬入前の窓ガラスの掃除を行なった。

(3) 「アウリンコ・徳地・タロ」のプレオープニング・イベントの実施

2011年12月4日から11日までの8日間アウリンコ・徳地・タロにおいて、「徳地の若手・手工芸作家展と徳地和紙や古布によるワークショップ作品展」を開催した。期間中休みは設けず、会場時間は午前10時から午後5時まで、そして入場は無料とした。

初日の12月4日のプレオープニングセレモニーでは、ボランティア等で運営に携わった地域の人や関係者に対して敬意を表し、テープカットの式典を行なった。人々に今後の理解と協力をいただきながら、この事業を継続していくことが念頭にあったからである。式典は、山口県と山口市の中山間地域の関係者の臨席のもと、徳地堀四区まちづくりの会の会長益田克彦からの挨拶や学生や作家によるギャラリートークを交え和やかに進化した(写真34・35・36・37・38・39)。(資料3)

当日は、展覧会の初日ということで、朝から地域ボランティアが駐車場係りを行ない、式典終了後の管理運営まで担当した。こうしたボランティ

アによる運営の実現は、会期の直前に、展覧会の広報のためのチラシを、山口市徳地全2600世帯に周知目的のため全戸配布したことや、班ごとによる回覧で支援の必要を要請したことによって可能になった。このチラシは、ワークショップに引き続き有限会社防府カラー代表取締役河合章夫に依頼した(写真40・41)。

展示作品は、若手・手工芸作家の作品とワークショップ作品の大きく二つに分類される。4人の若手・手工芸作家の構成は和紙人形作家の長沼隆代、ガラス工芸作家の伊藤太一、木工作家の重田秀徳、そしてオーダー家具の小松直樹である。

(4) 展覧会に選出した4人の若手・手工芸作家

和紙人形作家の長沼隆代は2001年より人形を作り始め、2006年山口市のクリエイティブスペース赤れんがにて初個展を開催した。第28回ニュークリエイティブ展入選作品「アメノウズメノミコト」をはじめ、徳地の伝統文化「徳地人形浄瑠璃」や信長・秀吉・家康・浅井三姉妹など戦国時代の武将や姫たち等、徳地和紙や柄の美しい友禅和紙を使用した立体の紙人形の作品を展示した(写真42)。

ガラス作家の伊藤太一は、1993年より米国のアートスクールにて芸術全般を学び、帰国後、2002年に富山ガラス造形研究所研究科を卒業した。東京をはじめ、日本各地で個展・グループ展に出展しながら、2004年に個人工房「たいちガラスアート」を徳地堀に設立し、併設のカフェ・ギャラリー「自由創作いとう」で作品の常時展示及び販売を行なっている。ベネチアングラスを和風・モダンにアレンジし、グラス、ボール、花器など、ガラスという素材だが、どこかあたたかい、ぬくもりを感じられる生活に溶け込む45点の作品を中心に展示を行なった(写真43)。

木工作家の重田秀徳は、株式会社マツダで開発用エンジンの鑄造用木型製作を経て、1991年に山口市徳地藤木に「重田木型」を開設した。カラフルな木工のパズルや動物の形をしたモビールなど、広く子どもから、お年寄りまで受け入れられる作品40点を展示した(写真44)。

オーダー家具の小松直樹は、2008年に14年間勤めた会社を退職し、木工の勉強をするために「岐阜県立木工芸術スクール」に入校した。2010年に徳地堀に「工房松ぼっくり」を設立し、オーダー家具の制作を開始した。ウォールナット材と地域資源である徳地和紙を使用したパーテーションは、無垢材の美しい木目に、優しい自然光によって現れる和紙の模様を楽しむことができる。優しくシンプルで部屋に自然に溶け込む家具15点を展示した。(写真45)

(5) 山口県立大学大学院生の作品展示

山口県立大学大学院生と、ワークショップ参加者による共同作品は、武永佳奈の袴パンツ5点と農具の形状から着想を得たTシャツ3点、浅田陽子のニットワークショップの見本作品であるコースター1点、共同制作作品ニットコラージュ1点「古(いにしへ)」、エコバックと和紙花6点、木村和枝の手漉き和紙のマーブル染め作品7点、松永美代子のパッチワークワークショップ作品タペストリー11点とお祝いキルト「寿ぎ(ことほぎ)」1点、藤田幸司のミツマタ、和紙、LEDを用いたコサージュ風照明作品3点、そしてフィンランドの伝統装飾ヒンメリ12点を展示した(写真46)。

作品の展示は、会場入り口をセンターにし、左右で展示スペースを分割することにより作家の作品と共同作品を分けて行なった。作品展のチラシを見ながら、地域ボランティアが来場者に明確な説明を行なうことができ、説明を受ける側も、作家の作品とワークショップの作品の違いが区別できるように配慮した。

徳地堀四区まちづくりの会からの要望で、会期中、徳地健康茶が気軽に試飲でき、座って雑談もできる交流スペースをアウリンコの一角に設けた。会場を訪れる高齢者のためにはこのスペースが不可欠であった。来場者に地域ボランティアが声をかけると、多くの人がそこで情報交換を行ない有意義な時間を過ごしていた(写真47)。また、12月18日に、山口県立大学講堂で開催されるクリスマス・ファッションショーVol.8の第2部で、中山間地域活性化事業として徳地地域を取り

上げ、「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクトの発表をすることをチラシの配布により紹介し、当日会場へ来られる人を募った。

(6) プレオープニング・イベントの結果

8日間の期間中、芳名帳に記載された来場者の数は約300人であった。徳地地域はさることながら、市内外からの来場者も多く見られた。毎日、交代で大学院生や地域ボランティアが運営に携わったことで、情報が口コミにより広がっていった。徳地堀四区まちづくりの会の会長、益田克彦は「広報のチラシを主要な公共機関にだけ配布する従来の広報活動以外に、地域の全世帯へ配布したことにより、情報の入手が難しい高齢者の世帯にも案内が届いた。そのため、近所の人と連れ立って会場へ足を運んで、楽しんだというお年寄りも多数いた。会場の近くにあるグループホーム徳地あいおい苑からも、高齢者が散歩を兼ねて来場し、楽しい時間を過したと地域ボランティアが感激していた」とインタビューに答えた。

山口県立大学大学院生の武永佳奈による袴パンツの制作趣旨や作品に興味を持ち注文した来場者も数名いた。オーダー家具の小松直樹は、会場のすぐ近くに制作の工房を構えている。そのために、小松は期間中ほとんど毎日会場に来て来場者の対応をすることができた。そして、展示作品以外の注文家具のオーダーを含む10点余りの注文を受けた。

(7) その後の活動

展覧会会期終了後の2011年12月18日に、山口県立大学講堂桜園会館にて、企画デザイン研究室主催のクリスマス・ファッションショーVol.8が開催された。3部構成のショーの中の受託研究等の発表をする2部において、筆者は中山間地域活性化に関する共同研究のプレゼンテーションを行った。徳地堀四区まちづくりの会長の益田克彦と徳地観光協会代表前田繁志、そして袴パンツワークショップ参加者代表の井上ミエ子に舞台上に登場してもらった(写真48・49)。

また、徳地の住民30名がこのファッションショーに来場した。参加者は、地域外に住む第3者が自分達の住む土地についてのプレゼンター

ションをしたことを新鮮に感じた。「今まで当たり前と思った、もしくは、忘れかけていた、自分達の住むまちで受け継いできた芸術や生活文化の魅力を再認識し、あらためて感動した」という声があちらこちらで聞かれた。

(8) 展覧会開催と今後の課題

資金面では、いろいろな問題も浮き彫りになった。

展覧会中、作家の作品の総合計は高額となり、作品の盗難・破損の対策として盗難保険をかけざるを得なくなった。

展覧会は、8日間行なった。今回はプレオープンの企画だったため、地域ボランティアに毎日交代で、2人程が来場者の対応をした。しかし、今後、企画展の際、どうやって人材を確保していくのが課題であろう。今回の展覧会は入場を無料としたが、今後、企画展の際には観覧料を定め、この場所の活動資金とすることも可能だ。

資金面の問題は、店舗の外装や、内装の問題とも直結してくる。本年度は、学生や地域の人による手作りの店舗改装を全面に行なってきた。しかし、スポットライトや展示用の棚など備品に関して、質を向上させるようにという要望は強かった。元の呉服屋のマークや名前が残った1.5m×10m程の外装の看板を白くすることが本年度の予算では精一杯の試みであった。来年度は、オープンに向け、そして、アウリンコという名前を皆さんに知ってもらうために、ロゴマークの入った表看板を設置することが必須条件である。

今後、このスペースにおいて、地域住民とアートによる文化芸術活動との融合が、明確な位置づけを持って行なわれる必要性が生じてきた。展示に関しては、地域の意見を尊重しながらも、展示作品のクオリティと作家の選択を慎重に行なうことが重要である。将来この事業を継続するには、更なる地域との相互理解、連携が求められる。

この場所を活用していくための、商品開発にも未知の可能性がある。ワークショップの共同作品の一つである袴パンツを引き続き展示し、新しく開発した徳地らしさをアピールできる地域発の製品として商品開発を進める予定である。現在、受

注による袴パンツの制作を、ワークショップ参加者の地域住民と武永佳奈が、アウリンコを拠点としたアトリエで推進していく案がある。この活動は地域の雇用にもつながる創造活動になる。

また、定期的にフィンランドの伝統装飾ヒンメリを制作するワークショップの工房としてこのスペースを利用し、大人だけでなく小学生等も参加できる市民レベルの異文化体験型の国際交流も視野に入れていく予定である。

美術館の年間スケジュールを参考に、常設展と、企画による展示も行う予定である。今回は取り上げなかった徳地地域やその周辺で活躍している芸術家や作家、芸術活動団体等の支援や情報発信をアウリンコで行なうことを考慮中である。

地域住民が自分達の住む地域の価値に気付き、それを誇りに思い、より豊かに生活を送れるよう、来年度に向けて新たな企画を検討中である。地域の人が気軽に足を運べる交流のスペース作りを目指した地域再生の試みは、始まったばかりである。 (文責：松原)

まとめ

以上では、中山間地域活性化に向けた服飾デザインとアートマネジメントに関する、1年目の活動を報告し、検証して来た。特に、徳地の堀四区まちづくりの会によって地域資源としての手漉き和紙そしてその原料となるミツマタの木が地域資源として、その価値と美が見直された。まずは地域の人々が地域を見つめなおすことが大切であり、それができたことは大きな成果である。

地域の人々が見学者にのみとどまるのではなく、夏祭りのイルミネーション、手工芸による生活小物そして国際交流から生まれたヒンメリなどのワークショップに参加することで、自ら創作者になったことは、非常に有意義であった。

また、使われなくなった呉服屋の店舗を改装し、新しい文化芸術の発信拠点としてアウリンコの空間が誕生したこと、またギャラリーとしての機能が認知されるまでになったことは大きな成果である。

まちづくりの活動には、継続性とそれを支える拠点形成は必須であり、1年目の活動としては非常にいい

形になったと考える。同時に、アウリンコが地域の人々が集うサロンの場所としても使用されるようになってきたことは、アウリンコの地域への定着の確実な第一歩である。

改めて全体を振り返るとこのプロジェクトはとくち夏祭りから始まった。従来の旧商店街が、まずは空間デザインの対象となった。徳地手漉き和紙は、現在、日常的に漉いているのは1軒だけであり、重源の郷でワークショップが行われているという現状がある。そこで、徳地和紙の魅力を広く知ってもらうために、ミツマタの皮を剥いだ枝を使ったプロジェクトとして、夏祭りのインスタレーションが考えられた。

結果として、旧商店街でミツマタそのものを知る企画によって人々が改めて原料のもとを知る機会ができたこと、そしてイルミネーションがある通りが出現し、新しい楽しみの空間が誕生したことは喜ぶべき成果である。同時に、当研究室が中心となり、山口市内の若者、留学生そして徳地の市民が共同作業をしたことで、その後の活動に大きなステップとなった。自分が制作したものが飾られるという喜びが、より地域に対する愛着を増幅していると感じられる。

また、制作者を識別する役割も兼ね、参加者が作った光源とオブジェに各々異なった配色で作られた葉を飾り、同じデザインの葉を制作者に贈るという企画もあった。材料には当研究室と徳地地域の出会いを生んだ古民家から出て来た着物を使い、ミツマタの成長過程と合わせて時間の経過に対する価値を印象づけた。自分の作品の一部を持つ事は、参加者がオブジェを制作した経験を振り返るきっかけになるだろう。同時に葉は、繋がり象徴として当研究室メンバーと地域住民の関わりを強め、始まったばかりのプロジェクトに対するモチベーションの向上にも貢献した。

フィンランドで現在クリスマス時に飾られているヒンメリはもともとスウェーデン語で天を指す言葉に由来しており、太陽神を祀るための装飾品であったものが、後にクリスマス飾りとして復活した経緯がある。フィンランドでは農家の人々が今でもライ麦などのストローで作られ、伝統文化と見なされている。

特別な専門的技術は必要がなく、作り手の工夫とアイデアで、簡潔でいて魅力的な形ができるために、筆者は国際交流を交えたワークショップとして適当と考

えた。結果は非常に有効な結果となり、短い広報機関であったが多くの住民が集まり、ワークショップは盛況であった。

来年の夏祭りの堀商店街の装飾としてヒンメリを飾るためには麦わらが必要である。この声を聞いてさっそく麦を植えると住人が申し出てきた。ヒンメリ装飾を地域の自然資源を使って制作することで、海外の習慣が自然に日本の年中行事に溶け合っ、新しい徳地の文化創造に繋がっていくことが期待される。

筆者は正8面体を基本形にしたシンプルなヒンメリを、クリスマス装飾の象徴ととらえ、12月18日に山口県立大学講堂桜園会館で行われたクリスマス・ファッションショーVol.8で、ロビーの空間装飾や舞台装置として設置するプロジェクトを行った。このプロジェクトにおいてエントランスホールのヒンメリ装飾は山口県立大学国際文化学部文化創造学科企画プロデュース系の基礎演習での受講者が担当した。この授業は筆者の外に田村洋・松尾量子そして山口光が指導を担当しているものである。また舞台上の巨大なヒンメリは筆者の担当する企画デザイン論の学生で担当した。来場した一般の鑑賞者から興味を持たれ、作り方を教えてほしいという要望が出てきた。

フィンランドにおける思想的な意味以前に、幾何学の造形が持つ力を感じさせるものでもある。簡潔な構造と視覚的力は、日本的なアニミズムの造形とも類似しており、聖なる表現と結びつくものだ。とくち夏祭りは地蔵盆に行われているもので、祖霊信仰が根底にある。来年の夏祭りでは、徳地手漉き和紙とLEDによって作られる照明装置が増産され、またヒンメリもLEDを組み込まれて新しい照明装置として展開されるだろう。

その結果、フィンランドとの国際文化交流から生まれ、LEDによる最先端技術と麦わらが組み合わせられた、新しい徳地の文化が誕生することになる。だれでもが参加できる点に魅力があり、今後、地域の人々に浸透されやすいものだ。

手漉き和紙を用いた4つのワークショップにおいては、制作された和紙花、コースター、マープル染め手漉きはがき、額入りパッチワークなどは、講師の見本が参加者の興味を引くものであったために、それぞれの参加者の個性が反映されてすばらしいものができ

た。これらの装飾品も、今後、徳地発の生活小物として、商品化の予定である。

袴パンツプロジェクトは地域らしいファッションのスタイルを作ることを目指しており、ワークショップでは共同で制作する仲間の人材発掘および人材教育が目指された。その結果、集まってきた人々は、日々着用している服は自分で作っており、またボランティア的な形でオーダーを受けて服作りをしている。

新しく出会ったデザインということもあり、1着目の制作では、技術的な課題もあったがもう少し訓練すれば皆、商品を制作する能力が十分ある。すでに個人や企業の制服などの注文の声が聞かれ、さっそく、ビジネスに向けたマネジメントををはじめたところである。袴という伝統的な形から着想を得て、徳地発ファッションというストーリーが、人々に関心を持っているようだ。今後の発展に期待される。

今回のアウリンコ・徳地・タロプロジェクトは、徳地地域の活性化のための活動である。研究室のゼミ生や学部生および留学生などが関わることで、短期間に多くのプロジェクトを実施し、地域の人々に新しい風が吹いていることが実感されるまでになってきた。

しかし、これらの活動は県や市の助成金の支えによって成り立っているものである。地域の文化芸術に関する活性化のサポートである我々の活動は、やがて地域が自発的に継続していけるような方法の伝授や人材発掘あるいは人材教育をすることが前提となるであろう。ただし1年で計画は全うされることは不可能である。しばらくは行政や助成団体の支援を受けながら、継続的に活動する必要があると思われる。

来年度の継続的な活動によって、徳地地域内外の文化芸術が紹介されるとともに、地域住民の創造力が高まるに違いない。そして、地域住民が地域資源を尊重することで、新しいクリエイションが生まれ、その結果が文化のみならず産業の振興にもつながって行くことを期待したい。(文責：水谷)

(註1) 水谷由美子 神, 大樹 磯部, 素男 片山, 涼子 永留, 靖洋 「山口市における産学連携によるアートがある街の創造: 『アグリ・アート・ツーリズム』の実践的研究」『山口県立大学大学院論集』、2008年を参考。

(註2) 指定・登録文化財「山口市」
<http://www.city.yamaguchi.lg.jp/dannai/soshiki/kyouiku/bunkazai/tokuditesukiwasi.html> 2011年4月20日取得

最後にこの場をお借りして、当研究を遂行するに当たり、共に活動しご協力いただいた堀四区まちづくりの会・会長益田克彦、徳地観光協会会長・前田繁志、堀四区兼堀自治会長・田立博信、旭自治会長・三浦幸三郎、西川自治会長・金子俊文、本町自治会長・徳重良治、および徳地旅づくり研究会副会長・松田龍二、アウリンコ運営のボランティアとして中心的に関わっている吉田正毅と有近節子、また井上ミエ子をはじめワークショップに参加された皆様、また行政関係では中山間地域活性化に関わる山口県の倉重龍昌、野村悟治、山口市の増岡裕二、石川映子他皆様、堀四区の住民の皆様がこの場をお借りして深くお礼申し上げます。さらにLED照明のコーディネートをした山口県産業技術センターの川村宗弘、LED照明の技術指導をした徳山工業高等専門学校伊藤尚教授そして山口県立大学江里健輔学長をはじめ事務局および山口県立大学付属地域共生センターの森近慎治次長他皆様またウィルソン・エイミー教授に心よりお礼申し上げます。

参考文献・参考資料

2章、3章

KCI『LUXURY in fashion』展カタログ 2009年。

大河直窮『歴史的遺産の保存・活用とまちづくり』学芸出版社、2006年。

三宅理一『負の資産で町がよみがえる』学芸出版社、2009年。

「全国手すき和紙連合会」http://www.tesukiwashi.jp/p/karasuyama_kasumi.htm 2011年8月8日取得

『世界百科事典27』平凡社、1988年。

『徳地堀四区ゼンリン地図』、2007年。

6章 7章

徳地町史編纂委員会『徳地町史』徳地町、2005年。

川崎賢一・佐々木雅幸・河島信子共著『アーツ・マネジメント』放送大学教育振興会、2002年。

「山口市 森林セラピー山口」

<http://www.city.yamaguchi.lg.jp/therapy/2011年12月22日取得>

「森林セラピー総合サイト」

<http://www.fo-society.jp/quarter/chugoku/yamaguchi.html> 2011年12月22日取得

■ 写真



1 改装前のまるしょう 2011年4月19日



2 「武永佳奈袴パンツ」撮影会① 2011年11月27日
重源の郷



3 袴パンツ撮影会② 2011年11月27日
重源の郷



4 LED取り付け作業 2011年8月13日 山口県立大学内



5 藤田幸司企画プロデュースの「徳地和紙イルミネーション」(徳地旧商店街入口) 2011年8月27日



6 ミツマタ 出典：林弥栄・古里和夫・中村恒雄監修『原色樹木大図鑑』北隆館、1985年、508頁



7 武永佳奈考案の葉（素材 古布）とくち夏祭り
2011年8月26日



8 藤田幸司を中心に行ったミツマタ照明ワークショップ
集合写真 2011年8月6日 徳地旧商店街

徳地手漉き和紙で豊かに生活を飾ろう
— 重源の郷 秋の1日ワークショップ —

●日時 平成23年10月22日(土)
午前部 10:00~12:00 ワークショップ1
午後部 13:30~16:00 ワークショップ2

●場所 山口市徳地「重源の郷」(庄原・白東)
〒747-0239 山口市徳地字島1137 TEL 0835-62-1250

●入場料・参加費 無料
(但し、昼食代として当日1,000円頂戴いたします)

【主催】 山口県立大学企画デザイン研究室
【共催】 郷4次まちづくりの会
【助成】 山口県・山口県地域文化発掘・創出・普及推進事業
山口県・山口県地域文化発掘・創出・普及推進事業
山口県・山口県地域文化発掘・創出・普及推進事業
【協力】 重源の郷、山口県立大学

9 ワークショップチラシ(表)

重源の郷 秋の1日ワークショップ

●日時 平成23年10月22日(土) 午前部 10:00~12:00 ワークショップ1
午後部 13:30~16:00 ワークショップ2

●場所 山口市 徳地「重源の郷」(庄原・白東) 〒747-0239 山口市徳地字島1137 TEL 0835-62-1250

●無料/バスでの運行を行います。(県立大学～徳地総合支所～重源の郷)のご案内は申込書にご記入ください。

【スケジュール】
08:45～ 山口県立大学企画デザイン研究室
09:15～ 徳地総合支所前集合(バス利用) 山口県立大学 徳地旧商店街 2年
09:30～ 重源の郷 入場口に集合(参加者全員)
10:00～ ワークショップ1 午前部
一枚の布で素敵なエコバッグを制作
(完成品は持ち帰ります)
12:00～ 昼食を兼ねた懇話会(昼食代有別 1000円)
13:30～ ワークショップ2 午後部(各コース定員10名)
●手漉き ●パッチワーク ●ニット
希望のコースに分かれて、紙漉きの小物製作
16:00～ 解 散(バスの方は乗車場所まで送迎あり)

【お問い合わせ先】
TEL & FAX 083-928-2550 (山口県立大学 企画研究室)
myumiko@yamaguchi-pu.ac.jp

★ワークショップに参加ご希望の方は、申込書に必要事項をご記入の上、切り取り線以下を下の用紙に郵送してください。折り紙・詳細をお送りいたします。 郵 送 コー ス 名 義 金 1 万 円 宛 振 込 申 込 可 能 な り 申 込 可 能 な り (10月15日必着)
〒747-0239 山口市徳地字島1137 山口県立大学
山口県立大学 企画デザイン研究室 ワークショップ 担当 渡 田 宛

10 ワークショップチラシ(裏)



11 エコバッグと浅田陽子考案の和紙花とニットコースター作品
2011年10月22日 重源の郷



12 エコバッグワークショップ制作風景 2011年10月22日
重源の郷



13 アートフル山口で展示したエコバッグ・和紙花作品
2011年11月5日 有限会社ナルナセバ内山口県立大学企画デザイン研究サテライト研究室



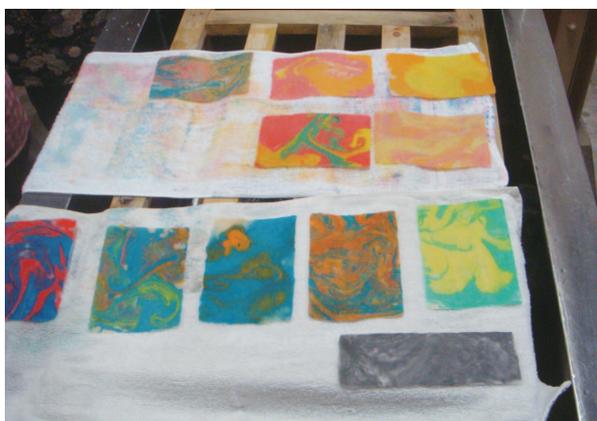
14 木村和枝考案のペンダント
(大理石と徳地和紙)



15 クリスマスファッションショーVol.8
木村和枝「石の記憶」



16 手漉き和紙のマーブル染めワークショップ制作風景
2011年10月22日 重源の郷紙漉きの家「日波」



17 木村和枝発案のマーブル染め作品 2011年10月22日
重源の郷



18 パッチワークワークショップ制作風景 2011年10月
22日 重源の郷「庄屋」



19 松永美代子考案の Patchワーク作品
2011年12月4日 アウリンコ



20 松永美代子お祝いキルト「寿ぎ(ことほぎ)」Patchワークとミツマタのペディ
ストールコンビネーション 2011年12月
4日 アウリンコ



21 クリスマスファッションショーVol.8 松永美代子
「サーミの宇宙」



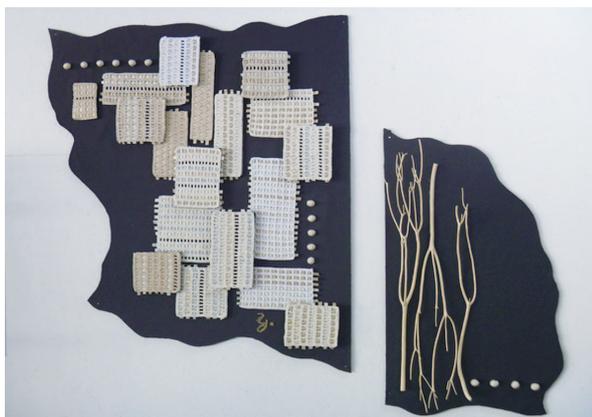
22 ニットコースターワークショップ制作風景 2011年
10月22日 重源の郷



23 浅田陽子考案のニットコラージュ「古(いにしへ)」
共同作品パーツ 2011年10月22日 重源の郷



24 アウリンコプレオープンig 展示風景 2011年12月
4日 アウリンコ



25 浅田陽子考案のニットコラージュ「古（いにしへ）」（ワークショップ共同作品） 2011年12月4日 アウリンコ



26 浅田陽子作品「帰森（きしん）」クリスマス・ファッションショーVol8



27 袴ワークショップ制作風景① 2011年10月23日 アウリンコ



28 袴ワークショップ制作風景② 2011年10月23日 アウリンコ



29 アートフル山口で展示した袴パンツ作品 2011年11月5日 有限会社ナルナセバ



30 袴パンツ展示 2011年12月4日 アウリンコ



31 ヒンメリワークショップ制作風景 左 指導者タニヤ・セベリカンガス (左) 2011年11月27日 アウリンコ



32 麦わらのヒンメリ作品 2011年12月4日 アウリンコ



33 ストローのヒンメリ作品 2011年12月4日 アウリンコ



34 改装後のまるしょう「アウリンコ・徳地・タロ」2011年12月4日 アウリンコ



35 アウリンコ・徳地・タロ式典風景 2011年12月4日 アウリンコ



36 式典進行風景 2011年12月4日 アウリンコ



37 式典での挨拶をする水谷由美子
2011年12月4日 アウリンコ



38 テープカット式典風景 2011年12月4日 アウリンコ



39 プレオープニングの展示風景 2011年12月4日
アウリンコ



40 「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクト紹介チラシ表



41 「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクト紹介チラシ裏



42 長沼隆代の和紙人形作品 2011年12月4日 アウリンコ



43 伊藤太一のガラス作品 2011年
12月4日 アウリンコ



44 重田秀徳の木工作品 2011年12月
4日 アウリンコ



45 小松直樹のオーダー家具作品
2011年12月4日 アウリンコ



46 展覧会風景 2011年12月4日 アウリンコ



47 中央和紙人形作家・長沼隆代 2011年12月4日
アウリンコ



48 クリスマスファッションショーでの「アウリンコ・
徳地・タロ」プロジェクト紹介 2011年12月18日
山口県立大学講堂 桜園会館



49 クリスマスファッションショーでの徳地地域代表者へのインタビュー風景
左から松原直子 益田克彦 前田繁志 井上ミエ子



資料1 朝日新聞（朝刊）2011年11月28日



資料3 山口新聞（朝刊）2011年12月10日



資料2 朝日新聞（朝刊）2012年1月10日

写真資料撮影者リスト

- 藤田幸司 4, 5, 6, 7, 8, 27, 28
- 武永佳奈 3
- 浅田陽子 11, 23, 25
- 松永美代子 12, 22
- 木村和枝 14
- 松原直子 1, 16, 17, 18, 31, 34,
- 吉田健次 2
- 河合章夫（有限会社防府カラー）
9, 10, 13, 15, 19, 20, 21, 24, 26, 29, 30,
32, 33, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43,
44, 45, 46, 47, 48, 49

